



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

第三二六号

小暑

七月七日

祇園さん

そろそろ梅雨明けが気になる頃、本格的な暑さがやってくる七月になりました。夏祭りのシーズンでもありますが、今夏は新型コロナウイルスの感染拡大により、人々が密集する神輿の渡御などは取りやめ、神社の神事のみ行うところが多いようです。

勇壮な三社みこしで知られる松阪の「祇園まつり」もしかり、神輿を出す神社の一つ、八雲神社を訪ねると、今年には神事のみですとのお答えでした。しかし、神輿は収蔵庫から本殿の神前に出し、トラックに乗せて、氏子地区を巡るそうです。「氏子さんは、少しでも神輿を肩に担ぎたいのです」と宮司さんは言います。

祭神の建速須佐之男命は、神々がすむという高天原で悪さを行い、追放されますが、出雲国で八岐大蛇を退治し、その際に天叢雲剣を得て、天照大神に献じたと神話で語られます。内宮の祭神、天照大神の弟神です。また、みすぼらし姿をしたこの神を「蘇民将来」が大切にもてなしたことから、その子孫は疫病や厄災から守ると伝えられたことから、伊勢志摩地方では疫病除けとして、しめ縄の門符に「蘇民将来子孫家門」と記すようになりました。

ところで、八雲神社の本殿を拝見して、驚きました。萱葺屋根ではありませんが、伊勢神宮と同じ、神明造なのです。それもそのはずで、今から二九〇年前、内宮の西宝殿を下賜されたそうです。西宝殿は、天照大神をまつる正殿の後方に建ち、正殿で二十年飾られたご神宝などを安置する建物です。それが、松阪の八雲神社に残っていました。コロナ退散、疫病退散の神さまのお力をいただきたいこの夏です。

文 千種清美



おかげの里便り

五十鈴塾

○『歴史に見る疫病退散と土用のお水汲み』

疫病は広範囲に集団的に発生・伝播する感染症です。人間の生死を左右した最大の原因は戦争や天災ではなく「疫病」だそうです。

古代から底知れぬ恐ろしさを持つ疫病の原因は荒ぶる神、疫神、疫鬼、怨霊の仕業とか、仏罰、神罰による超自然的なものを想定してそれらを鎮めるという考え方が主流でした。

陰陽師による疫神祭、僧侶による加持祈祷などが国家規模で行われたのです。伊勢地方に掲げられている蘇民将来子孫之門の札がついた注連縄もまたそのひとつです。

その昔この地を旅した牛頭天王が一夜の宿を求めた時に、蘇民将来は貧しいながらも精一杯のもてなしをしました。すると「明日この村を疫病が襲うから茅の輪をつけておけ」と教えてくれました。

次の日疫病で村は全滅しましたが、蘇民将来の家族は助かりました。この故事にちなんで伊勢地方の家々は注連縄に蘇民将来子孫之門というお札を付け厄災よけとしたのです。

この話は日本全国にもあり、夏至の日に茅の輪くぐりをするのもこれに由来するといわれています。コロナが猛威をふるっている今、昔の人が疫病にどのように向かったのか神崎先生にお伺いしましょう。

この日はちょうど土用の丑の日、災難除けに五十鈴川のお水を汲む日です。明治ごろにはじまった風習ですが、神崎塾長と一緒にお水を汲んで、瀧祭神に祈り、御正宮で国の安泰を祈願して荒祭宮でプライベートなお願いをいたしましょう。そして忘れてはならないのが暑さに負けず病にも負けないようにうなぎを食べて精をつけること、まさに病除け、災難除けの講座です。

と き／7月21日(火) 9:00～12:30

講 師／神崎 宣武 (民俗学者・五十鈴塾塾長)

参加費／一般4,500円 会員4,000円 (昼食代含む)

集合場所／9:00に内宮宇治橋前集合

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 節気菓子

みずぼたん
水牡丹

牡丹色に染めた梅の甘露煮を、葛寒天で包みました。水ぎわから、涼しい夕べの風が吹き込むかのようです。

ほおずき

暑さがつのと同時に、赤みを深める、ほおずき。外郎(ういろう)生地で黄味餡を包み、ほおずきの実に見立てました。

みす
御 簾

緑に色付けした餡で粒餡を包み、琥珀羹で巻いたお菓子。目にも涼しく、夏の暮らしへの想いを表すひと品です。